虹の橋

にじのはし

澤田ふじ子

虹の橋

澤田ふじ子

中央公論社

虹の橋

定価一〇〇〇円

昭和六十二年九月十日初版印刷
昭和六十二年九月二十日初版発行

著者　澤田ふじ子
発行者　嶋中鵬二
印刷所　図書印刷
発行所　中央公論社
〒104　東京都中央区京橋二―八―七
振替　東京二―三四
ISBN4-12-001613-7

©一九八七　検印廃止

虹の橋

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章

一

「柴いりまへんかあ。柴どうどす」

洛北の大原からくる柴売りが、すんだ声をあげて町辻をすぎていった。

凍てた雪のうえに、また粉雪が舞っている。

京の底冷えは、旧暦十月下旬、例年にもましてきつかった。

数日まえに降った雪が、ひくい廂を建仁寺脇にひっそりならべた宗椿長屋の軒下や、せまい路地の陰にまだとけずに残っていた。

長屋は東西に四軒がむかい合わせに建ち、建仁寺の練塀ごしに東山のうねりが遠くにながめられる。八坂の五重の塔がひときわ目に映った。

毎朝、宗吉は長屋の木戸口で父親の忠七を見送り、八坂の塔を見上げる。

ものごころついてから、かれはその場所に立ち、古びた色をおびて建つ五重の塔をながめるのが好きであった。

――この五重の塔はいつからあそこにあるのやろ。塔のてっぺんにのぼって、京の町を見下したら、ごつう気持がいいやろな。

東山から京の町を見下すのとは、またちがった爽快さを感じるはずであった。

ああしたものを見ていると、なんだか胸がさっぱりしてくるのである。

宗吉の父親は、高瀬船の船頭をしていた。

京の町中をながれる高瀬川は、慶長十六年、角倉了以によって開削され、京、伏見、大坂をむすぶ河川運河として大きく役立っていた。鴨川の西岸上樵木町の樋口から、鴨川にそって南に下り、伏見に接する宇治川に合流し、さらに大坂までのびている。

高瀬船は客や荷をのせ、京と伏見のあいだを往来し、四条の船溜りから早発ちも遅発ちもするだけに、父親が仕事にいく時刻にもばらつきがある。宗吉が見送りにでるのは、遅勤めの日にかぎられていた。

「宗吉、雪に降られながら、なにをぼんやりみているのや。おかあはんの呼んでは声がきこえへんのかいな」

いまも雪をあびた八坂の塔に目を這わせていた宗吉は、祇園の料亭で働いている彦十にどなら

れた。
時刻は五つ半（午前九時）を大きくまわっており、雪雲のきれまから青く冴えた冬空がのぞいていた。
「彦十はんおおきに、気いつけてお出かけやす」
肩をすくめ木戸口をくぐっていく彦十に、宗吉はお愛想をいい、家のなかにかけこんだ。
「ちえっ、この長屋の餓鬼どもは、大人にさえ世辞をいいよる」
彦十は独言をつぶやき、建仁寺道を上にいそいだ。しかし悪い気持ではなかった。
かれは料亭で宴会があったおり、ときどき残りものを長屋にもちかえってくる。
食べざかりの子どもをかかえる四軒に、それを小分けして配ることから、宗吉たち子どもに慕われていた。
長屋の人々はいずれも職人か日傭取りで、四条高倉で茶道具屋をいとなむ家主池田屋宗椿のもとに、銀十五匁の家賃さえとどけかねる家もあった。
暮しが貧しいだけに、わずかな物でも一食の足しになり、彦十があやしげな女を家に連れこむのをみても、誰も苦情をもらさなかった。
「彦十はんは苦労人や。心根のやさしいお人にきまったる。ただ女癖が悪いだけやわ。せやけど、三十もすぎたるのやよってに、いい加減に世帯をもたなあかんわなあ」

朝、かれのあとから若い女が、顔をかくすようにして木戸口を出ていくのを見送り、長屋の女たちがささやく声を、宗吉も以前きいたおぼえがあった。

「宗吉、だれと話してたんや」

宗吉が母親の臥った奥の部屋に顔をのぞかせると、さだが布団のなかからたずねかけた。

宗吉の母親は十日ほど前から、風邪をこじらせて寝こんでいたのである。

町医者から、働きすぎだ、当分のあいだ西陣の出機仕事をやめ、気養生しなはれとすすめられていた。

出機は、糸などの材料を織屋からあずかり、家で機を織る仕組みをいう。さだは十三のとき、丹波の篠山から西陣の但馬屋総左衛門のもとへ奉公にきて、二十二歳で四条の船宿で働く忠七と知りあい、世帯をもったのであった。

そのあともさだは、但馬屋の仕事をつづけてきた。

夫婦が一生懸命に働いて小金をため、いずれ町船肝煎役から高瀬船の船株をゆずってもらう。夫の忠七を船持ちの船頭にするのが、さだの望みだった。

朝早くから夜おそくまで、彼女は働きつづけた。世帯をもった翌年に宗吉をみごもり、腹が機につかえるようになっても仕事をした。

その無理が、三十すぎになってあらわれたのであろう。稼いだ小銭が薬代に化けていくのが、

いまの気がかりであった。
しかし布団に横たわったまま、宗吉にたずねる声に、以前の張りがもどっていた。
「むかいの彦十はんが、おかあはんが呼んでると教えてくれはったんや。わしは気いつけてお出かけやすというといた」
「おお、それはええあんばいやったなあ。宗吉も来年は十になるのやよって、ご近所のお人に会うたら、もうきちんと挨拶せなあかんのやで」
「それでゆうたのやがな」
宗吉は胸をそらせて誇らしげにいい、赤く腫れた手で母親の布団のえりをおさえた。
竈の熾火をいれただけの火鉢は、すでに温みがなく、家のなかはしんと冷えていた。
どこからともなく隙間風がふきこんでくる。
「外はまだ雪がふってるのか」
「うん、ちらちらしてるわ。なかなかやみよらん」
「こんな寒い日は、おとうはんの仕事も冷とうおすやろなあ」
布団のそばに坐った宗吉に、さだは話しかけた。
冷えたうす暗い部屋、宗吉にでも話しかけなければ、気が滅入りそうであった。
高瀬船の船頭も、伏見までの下りはいいが、上りは船綱を助役と二人で、川ぞいの道を肩でひ

き、荷や客を京の町中まではこんでくる。冷たい川風に身をさらすだけでなく、ときには河中を歩かなければならない。病人とはいえ、自分だけが布団のぬくみに身をおいているのが、さだにはつらかった。

忠七は三十四歳、身体は頑丈にできていたが、それでも長年の力働きのせいか、冬になれば、足腰に痛みがはしるともらしていた。

近頃、もどりはいつも五つ（午後八時）すぎであった。

「おかあはん、そのうちにわしが大きゅうなって、おとうはんを手伝ってやるよって、安心しとったらええのや。それよかわしは、弥市やお貴和ちゃんをさそって、内浜にいってくるわ。余分な考えせんと、じっと寝ていよしな」

宗吉は小生意気にいって土間に下り、麻袋をかかえ、表にでていった。

「気いつけていってきなはれや」

「わかったるわい」

乱暴な口調で母親にこたえ、かれは斜め向いの弥市の家の前に立った。

弥市は宗吉と同じ歳である。

両親の勘助と粂は、長屋からどれだけも離れていない四条の南芝居小屋（南座）で、裏働きをしていた。母親の粂は、四つになった弥市の妹あきをつれて、芝居小屋にでかける。勘助のほうは、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

宗吉の父親とおなじでもどりがおそかった。
貴和はかれらより一つ下で八歳、家は弥市の北隣になる。父親は式部の雅号をもつ扇絵師だが、いつも酒びたりで、母親の伊勢が仕立物をして細々と暮しをたてていた。
「弥市、これから内浜へいけへんか」
宗吉の呼び声につれ、家のなかから弥市がとびだしてきた。
二人とも垢じみた紺のきものに、袖なしの綿入れ袢纏をきて、素足に草履姿。長屋住いの子どもなら珍しくない格好だった。
「お千代ちゃんやお貴和ちゃんはもうさそったんけえ」
弥市は青洟をすすりあげてたずねた。
きものの右袖が薄汚れ、固くなっている。青洟をすすったあとをぬぐうからであった。
「おまえお貴和ちゃんをさそったれや。おれはお千代ちゃんをよんでくるよってに」
宗吉がいうのに、弥市はにやっと顔をほころばせた。
弥市には、千代によせる宗吉の気持ぐらいとっくにわかっていた。
——大人になったら、わしはお千代ちゃんをきっと嫁はんにもらうんじゃい。
いつか宗吉が弥市に力んでみせた言葉が、いまも胸によみがえっていた。
二人はこの長屋で生れ、ともに育ってきた。

両親たちはいずれも貧乏だが好人物。ものの貸し借りや惣菜のやりとりは毎度で、八軒長屋のなかでとくに親しかった。

それだけに、子どもながら将来の夢も親しく語り合う。宗吉は父親を手伝い、やがて船主になり、高瀬船を幾艘ももつのだといい、弥市は働いて金をため、芝居小屋の金主になるのだと、たがいに誓い合っていた。

二人は子どもでも貧乏暮しのつらさに、憎しみをいだいていたのであった。

「いまの約束、ぜったいに忘れんときや」

「おお、きっと高瀬船をぎょうさん持ったるわい。みてけっかれ」

弥市に念をおされ、宗吉が大きな目に力をこめ、強くうなずいたのは、今年のはじめだった。

千代の家は宗吉の家と棟つづきの一軒おいて隣り、奥北のはずれにあった。

兄の富士太は十歳になった今年の春、室町姉小路の下駄屋「近江屋」へ奉公にだされ、千代のほか家には、妹のきく三歳がいた。

母親のたみは、きくを産んでまもなく、女中づとめをしていた薬種問屋の井戸にあやまって落ちて死に、父親の九兵衛は、二条両替町の筆屋で職人として働きながら、幼い兄妹たちを養ってきた。

二つちがいの兄が下駄屋に年季奉公にいってから、家事は八つの千代が、小さな身体でいっさ

いおこなっている。
やさしい富士太にくっついて行動していた長屋の子どもたちは、当座、さびしい思いをした。
宗吉の母親は手のあいた粂と相談のうえ、なにかと千代姉妹の世話をみてやっていた。
宗吉、弥市、千代、貴和の四人が仲が良いのは、年が似かよっているからだった。
「お千代ちゃん、内浜へいけへんか」
宗吉は九兵衛の家のまえにくると、節穴のめだつ板戸にむかって大声をかけた。
いつも無精髭をのばしている九兵衛は、とっくに両替町の店にでかけ、家のなかからきくをなだめる千代の声がきこえていた。
「宗吉ちゃんか、ちょっとまっててや。うちすぐ用意するよってに」
千代の答えがすかさず返ってきた。
先ほどまで舞っていた粉雪がやみ、京の空は青くひろがりかけていた。
長屋にはこのほか、子どものない錺師の新助夫婦が棟西のかかりに住んでおり、弥市、貴和の家につづく北二軒は空家であった。
北はずれの一軒は家主の宗椿が物置きがわりに使っており、あと一軒は、不吉が重なり借り手がなかったのだ。
首つりがあったのと、つぎに住みついた西国筋の浪人が、藩家からの追手にとり囲まれ、自刃

したからである。
東条小十郎と名乗っていた中年すぎのその武士は、一時、建仁寺にちかい十王堂の空部屋を借り、寺子屋をひらくほどの学識をそなえ、貴和が生れたとき、彼女の名付親をつとめた。
「勝鬘経義疏や法華経疏をあらわされた聖徳太子さまは、憲法十七条のはじめにおいて、和をもって貴しとなすともうされた。それにあやかり、この子の名を貴和といたしてはどうでござる」
かれは墨跡あざやかに記した二文字の意味を説き、式部夫婦にいった。
長屋に住んで二年もたっていなかったが、壁一つへだてた隣りだけに、式部夫婦が切れそうな糸で、辛うじて結ばれていることぐらい推察できる。東条小十郎は生れてきた子どもが、夫婦の強い鎹になれと念じながら、貴和の名をつけたのだ。
後ほどきこえてきた噂によれば、小十郎は藩重役たちの不正をあばこうとして失敗、身をかくしていたのだという。
「宗吉ちゃん、おまちどおさん」
板戸が開き、千代がきくを背中に負ってあらわれた。
千代はどこへでもこうして出かける。宗吉や弥市も、そんな千代の姿になれきっていた。
「そんならはよ行こか。急がんと人にひろわれてしまうで」
宗吉は千代の背に負われ、守胴着のなかに小さな顔をうずめているきくに、笑いかけてうなが

した。

内浜は七条にあり、高瀬川が開削されたとき船溜場として開け、やがて貯材場となり、江戸時代、薪炭などの林産物問屋が軒をつらねていた。

子どもたちはその内浜に行き、道にこぼれているくず炭を、拾ってこようというのだった。

「あれ、お貴和ちゃんどないしたんやろ」

二人は期せずして足を止め、貴和の家のまえで棒立ちになっている弥市に目をこらした。

同時に貴和がわっと泣き声をあげ、ぬかるみの表にとびだしてきた。

家のなかで式部の濁声があがっている。

ものをたたきこわす音が、子どもたちの足をすくませた。

二

日暮れから、また雪は本降りになった。

暗くなりかけた空から、白いものがとめどなく落ちてくる。

夜には京は白一色の世界になった。

「この雪で、予約をうけていた客も足止めだわ。おれがせっかく丹精こめてつくった食い物も、用無しになってしまいやがった。どっさり持ってきてやったから、存分に食ってくんねい」

端唄をうたいながら、雪のなかを千鳥足でもどってきた彦十は、子どものある家を一軒一軒まわり、二重折りをおいていった。

かれは酔っぱらうと、伝法な江戸弁になる。

生れたのは江戸の浅草だといい、二十をすぎてから訳があって、上方に流れてきたのだともらしていた。

何げない言葉の端々から、彦十の幼い日の生活がうかがわれた。食べるのにも事欠いた暮しの記憶が、子どもたちへの行為になっているのは確かだろう。

「おや、お伊勢さんにお貴和ちゃんは、宗吉とこにいたのかいな。じゃあ折りはここに置かしてもらうわあ。おかみさん、また旦那にやられなすったね。なあに、悪い酒がさめりゃあ大人しくなりなさるぜ。それまでのご辛抱、ご辛抱さね」

火鉢のそばでうなだれている伊勢に、彦十は独りでまくしたて、自分の家にもどり、立てつけの悪い戸をぴしゃっと閉めた。

壁一つへだてた隣りで、音がそのままひびいてくる。

「わあい、ご馳走やで」

火鉢に手をかざしていた宗吉の目が輝いた。

火鉢のなかには、くず炭が赤々ともえている。今日、宗吉と貴和たちが内浜でひろってきたも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com